

2011年6月18日、第23回日本ジェイムズ・ジョイス協会研究大会が開催されます。
会場は京都ノートルダム女子大学となります。プログラムは別紙の通りです。
ご出欠のハガキを同封しましたので、5月中の投函をお願いいたします。今回の Newsletter には、
研究発表要旨、シンポジウム(×2)の梗概を掲載しました。

Topics

- 第23回研究大会
 ～研究発表要旨、シンポジウム梗概～
 ～懇親会のお知らせ～
- 京都の宿(宿泊情報)
- 事務局からのお知らせ
- (別紙)大会プログラム・懇親会場のご案内

第23回研究大会 研究発表要旨、シンポジウム梗概

1. 研究発表(発表順)

(1) Maria は本当に “proper mother” なのだろうか —— ‘Clay’ について

佐久間 思帆

‘Clay’は独身の中年女性 Maria が、かつて乳母として育てた Joe に招かれ、街中でのいくつかの困難に直面しながらも、Hallow Eve のパーティーへと出掛けていくという、わずか数ページの作品です。しかしながら、作品の語りと Maria の行動との間には矛盾があり、Maria が置かれている状況は、はっきりとわかりません。Joe は“Mamma is mamma but

Maria is my proper mother”と呼んでいます。Mariaには“proper mother”として乳母を務めるほどの器量があるようには読み取れません。そして、そんな彼女が“Dublin by Lamplight laundry’でなぜ働かなければならないのか、疑問が残ります。本発表ではこれらの矛盾と、Mariaは本当に“proper mother”なのだろうかということを考えたいと思います。

(2) *Ulysses*に見るジブラルタル

下川 理英

*Ulysses*のヒロイン Molly Bloom はジブラルタル出身で、彼女の父親の Brian Tweedy がアイルランド人、母親の Lunita Laredo が現地のユダヤ人娼婦であることは知られている。彼女の出自が、英国軍の駐屯地内で育った Molly のアイデンティティ形成にどのような影響を与えたか明らかにし、Joyce が作品にジブラルタルを描いた意図を探るのが本発表の目的である。

ジブラルタルはイベリア半島の南東端に位置していて、古代より大西洋と地中海を結ぶ要所であり、18世紀初頭のスペイン継承戦争を機に英国の領地となった。当時のジブラルタルを知る一般向けの手掛かりとしては旅行ガイドブック程度しかなく、Joyce は主に Field による *Gibraltar* (1893)から風土的知識を得たとされている。また、Molly の両親のモデルとして考えられている作品として Ibanez の小説 *Luna Benamor* (1909)がある。上記の資料や小説を使って、Joyce は旅行したことのないジブラルタルを描くことで、何を表現したかったのか、複雑な背景を持ちながらも英国植民地であるジブラルタルの駐屯地内で生活する Molly の理想と現実に注目しながら、考えてみたい。

本発表では、まず英国植民地としてのジブラルタルとそこに住む人々の環境を、前述のテキスト *Luna Benamor* と *Ulysses* から抽出する。そして、そこから植民地特有の支配者と被支配者の関係を精査しながら、駐屯地の組織の中で英国軍人の娘としての自意識を持ちながらも英国人になりきれない Molly の自己実現の限界を示す。その様子は、*Ulysses* 第18挿話の中で幾度となく表れている。この情景を通して Joyce は何を伝えたかったのか、1904年6月16日の Molly の意識と併せて考察してみたい。

2. シンポジウム

Dubliners の亡霊 —— 彼ら死者の目覚めるとき ——

司会 吉川 信

語学の教科書から文学作品が激減して久しい昨今、それでも未だにいくつかの短篇アンソロジーは絶版を免れているようです。ジョイスの場合 *Dubliners* だけは、教科書会社のカタログ

グで今でも目にすることができます。それが今回 *Dubliners* を取り上げるに至った理由ではありませんが、現在の大学生にとっても *Dubliners* だけは、未だ原文で目にする機会のあるジョイス作品であり、この短篇集に関するシンポジウムを企画することは、ひょっとすると教壇での利用にも、些かの貢献があるのでは、という気がしています。

さて、本当の理由は（複数の研究書は出ていながらも、けっして明確な定義があるようには見えない）「アイリッシュ・ゴシック」の系譜研究というところにあります。19世紀に「プロテスタント・アセンダンシー」が描き出した「恐怖小説」の傾向を、ジョイスはなんらかの形で消化・吸収し、さらに読者を挑発しているのではないかと。たとえば、「短篇ミステリー」が流行した19世紀半ば、代表格としてレ・ファニュがいました。彼がディケンズ編集の週刊誌 *All the Year Round* に寄稿していたこと、また彼自ら *Dublin University Magazine* を編集していたことも、文学史上は重要な背景と言えます。したがって、一般に自然主義的と言われる *Dubliners* に、そうした19世紀小説の傾向性の一端を精査することも、それなりの意味はあるだろう、と考えます。また「アイリッシュ・ゴシック」は、「アングロ＝アイリッシュ・ゴシック」（それは主としてカトリシズムの「悪」を暴きたててきたと言えます）と微妙に異なる布置を呈しています。亡霊譚ということ言えば、ダンテ以来煉獄に留め置かれた魂たちとの交流は、カトリック教徒のイマジネーションも刺激し続けてきたに違いありません。

しかしながら、「ゴシック」や「恐怖小説」という名称はしばしば実に曖昧で、「ジャンル」として語れば相当の危険が伴います。つまりは「怪談」、「ミステリー」、「ファンタジー」と境界を接し、容易にもうひとつの長大な伝統——「神秘主義」に足元を掬われてしまいそうです。今回タイトルに「亡霊」と据えましたのは、もっぱらその種の危険を搔い潜り、「死者」という共通項をアリアドネの糸にできないか、という算段です。

Dubliners のシンポジウムでしたら、主題的な切り分け以外にも、たとえば「4つの相」に沿って取り上げるなど、今後多くの試みが可能でしょう。今回まずは初めての試みとして、パネリストの皆さんの読みが、ジョイス作品全体に、新たな光を投じてくれるのではないかと期待しています。

自分だけの部屋 ——“A Painful Case”に見る不在の詩学

桃尾 美佳

亡霊の登場をもってゴシック小説の特徴とするならば、“A Painful Case”も一応はその範疇に入ることになるだろうか。ダフィ氏が亡きシニコウ夫人の「声」と「手」の気配を感じるという描写を亡霊出現の合図と解釈するなら、本作は確かに伝統的なゴシック小説の要素を備えていることになる。とはいえ、多くのゴシック小説に登場する亡霊たちが多弁と露出趣味によって極めて強い自己顕示欲を示しているのに比べると、シニコウ夫人の霊は（生前の優しい性質を反映しているにしても）いかにも控えめで謙虚である。ダフィ氏が感じるのは彼女のあえかな気配だけ、それも視覚でなく聴覚と触覚に訴えるのみで、彼女の「声」が何を語ったのかさえ判然としない。彼女の謙虚な「気配」を典型的なゴシック小説の怪奇の範疇に組み入

れてしまっは、ナイーブな解釈という謗りを免れないように思う。“A Painful Case”はむしろ、典型的なゴシックの道具立てを暗示的に利用しつつ解体している点で、ゴシックのパロディとして読むことができるのではないか。本発表では特にダフィ氏とその部屋を巡る描写に注目する。彼の自室は世俗から隔絶した小規模な異世界の構築を意図した空間にも見えるが、そうした閉鎖性もまたゴシック小説のひとつの特徴だからである。ゴシックの諸要素が彼の人物造型に逆説的に反映されている可能性を検討したい。

薔薇十字会員の亡霊 —— “The Sisters” とオカルティズム

田多良 俊樹

ゴシック小説のモチーフを“*The Sisters*”に見出すことはさほど難しくない。たとえば、フリン神父のいわくありげな「死」、主人公の少年が遭遇する神父の「亡霊」、コターが強調する神父の「奇妙さ」と「不気味さ」、イライザが証言する神父の「狂気」と「異常行動」などが挙げられる。しかし、ジョイスは、なぜ“*The Sisters*”をゴシック風に仕立てたのか。注目すべきは、本作品の改稿箇所である。ジョイスは、現行版に至って初めて、主人公を「薔薇十字会員」と呼び、フリン神父の没年を「1895年」と明確化した。これによって、ジョイスは、イェイツに代表されるアイルランド作家のオカルトへの傾倒に密かに応答したのではないか。そして、この点が逆説的にも“*The Sisters*”現行版のゴシック性を増す結果となったのではないか。本発表では、“*The Sisters*”改稿の意義を、心霊主義・薔薇十字思想・神智学等の文脈の中で問い直し、本作品をゴシック小説として再読する契機をとらえたい。

“*Ivy Day in the Committee Room*”における死者たち

戸田 勉

“*Ivy Day in the Committee Room*”（以下“*Ivy Day*”と略記する）の大きな特質は、不在の人物を軸として話が展開する構成である。ジョイスはこの着想をアナートル・フランスの短編から得たと述べているが、興味深いことに、この手法は“*Ivy Day*”ばかりでなく“*The Dead*”の構成の下敷きとしても用いられている。不在者としての死者の位置付けは、この2作品ばかりではなく、*Dubliners*の他の作品においても解釈上の重要な鍵となるだろう。

“*Ivy Day*”における死者の中心はもちろん Parnell であるが、他に、Queen Victoria や Major Sirr らの歴史上の人物や、Tierney と Hynes の父親、あるいは、ウェストミンスター の委員会室や王立取引所 (Royal Exchange) といった歴史的建造物なども含まれているように思われる。この発表では、“*Ivy Day*”に組み込まれたゴシック的要素を検証しながら、これらの死者たちが過去の記憶としてよみがえり、委員会室のメンバーに、そして 20 世紀初頭のダブリンにどのように憑りついているか考えてみたい。

3. シンポジウム

To the West! —— ジョイスとアメリカ

司会兼講師 横内 一雄
講師 下楠 昌哉
講師 中垣 恒太郎

ジョイス研究が正攻法の作品論に飽き、トリビア・ネタ探しに走り出して久しい。そんな中、一昨年の *James Joyce Quarterly* に、またもやジョイス雑誌らしからぬ、ネイティブ・アメリカンを表紙に冠した三文小説が復刻掲載された。何だろう、“An Encounter”で少年たちが読みふける西部小説の元ネタではないかという。それを見て、なるほどこういうものを見つけてくるだけでも業績になるのか、と思うとともに、カビ臭いジョイスの世界と雄大なアメリカ西部との意外な縁に想いを馳せずにはいられなかった。

これまでジョイス研究は、ともすると旧世界にばかり目を向けてきたのではないか。ジョイス自身がインテリで、ヨーロッパびいき、さらにはその先のオリエント志向であったため、批評家もついダブリンを軸に東をじっと見据えてきた。しかし、その間にもアメリカはずっとそこにあったのだ！多くの移民がそこへ旅立ったし、そこから独立運動が指揮された。アメリカの文化、イメージのアメリカだって、年端のいかぬ子供たちにまで浸透していた。よく見ると、ジョイスの作品にもアメリカの影が偏在する。田村章氏はそれを詳細に紹介している。アメリカを眺めるジョイス、もっと言えばアメリカが生んだジョイス——そういうものを新たな作家像として構築してみる価値はあるのではないか。本シンポジウムはそういう想いから構想され、ジョイス研究にしばしの方向転換を促すために“To the West!”（西へ！）と題してみた。それは「西部へ！」という誘いでもあり、「フロンティアへ！」という叫びでもある。

「ジョイスとアメリカ」——この主題設定では、どうしても「ジョイスからアメリカへ」という話に収斂しがちだ。ジョイスがフォークナー、ピンチオン、もしくはアメリカの大学産業にどう受容されたか……。それはそれでいいのだが、そこにはどうも、文化はヨーロッパ（旧世界）からアメリカ（新世界）へと流れるものだ、というある種の権威主義を嗅ぎ取ってしまう。そうではなく、アメリカがジョイスに文化的影響を与えることだってあったはずだ、という想定から、本シンポジウムでは「アメリカからジョイスへ」と方向を敢えて転倒してみた。詳細は調整中だが、下楠はアメリカが（ジョイスを含む）アイルランド人の想像力に内在していることを示し、中垣はアメリカ文学が大西洋を超えて旧世界に押し寄せる様を報告し、横内はジョイスの文体モデルをアメリカ作家に求めてみるだろう。そして、できるだけ報告時間を絞って、フロアの皆さんの知見を伺う時間を作りたいというのが、われわれ三人の望みである。

懇親会のお知らせ

18:00 からは懇親会が予定されています。会場は東華菜館（洛北店）の3階です（プログラム裏面の地図をご参照ください）。

懇親会費は、ドリンク込みで 5,500 円とさせて頂きました（生ビール、五年もの紹興酒、焼酎、日本酒、ノンアルコールビール、ソフトドリンクなど、飲み放題だそうです）。事前にお振込みください。多くの方々のご参加をお待ちしております。

京都の宿

須川 いずみ

今回の地震でそれぞれ大変な思いをされたのではないのでしょうか？京都ではほんの少し知覚した程度でしたが、家族や親戚が関東におりますし、阪神大震災を思い出さずにはいられませんでした。地震の影響で関東地方ではまだ不便な生活が続くと思いますが、少しでも早く日本に平穏な生活が取り戻されることを願う毎日です。

さて、このような状況ですが、6月18日の学会が京都で行われることになり、ご足労をお掛け致しますので、少し私の方から宿泊予約されるに当たっての情報を差し上げようかと思えます。

今回の開催大学である京都ノートルダム女子大学は北山通りにあり、前々回の京都府立大学のすぐ近くにあり。つまり京都駅から地下鉄烏丸線乗車15分の北山駅界隈です。大学周辺のホテルはお勧めしません。2つあるホテルの宝ヶ池グランドプリンスホテルもアピカルインも観光されるにしても、お帰りなるにしても便利ではないからです。

お勧めは地下鉄烏丸沿線の街の中のホテルです。たとえば京都ガーデンパレスホテルは丸太町駅と今出川駅の間にあるきれいな私学会館なので、私学関係者だと割引が使えるよいホテルだと思います。また、立地だけで言いますと、河原町通りと烏丸通りの間、御池通りと四条通りの間の四角形地域がベストです。その辺りですと、ビジネスホテルや旅館が一杯あり、祇園に行くにしても歩けない距離ではありません。特にお勧めはホテルマイステイズ京都四条、ホテルモントレイ、三井ガーデンホテル京都四条で部屋がきれいだと聞いています。その他三井

ガーデンホテル三条、コープイン京都、からすま京都ホテル、東横イン四条、ハートンホテル京都、ホテルギンモンド、京都ガーデンホテルなどが頭に浮かびます。どこも予約が早いと早割で安くなると思います。もっと高級なホテルですと、京都ホテルオークラと京都ロイヤルホテル&スパがあります。もっとリーズナブルなところだと、ファースト・クラスキャビン京都というおしゃれなカプセルホテルもあります。ここにはビジネスキャビンもあります。その他ツインでルームシェアや、ユースホステルを含めて地域を広げての選択なども考えられます。京都駅周辺からJR沿線だと便利ですし、もっとよいところがあるかもしれません。また新幹線や夜行バスつきのパックもあると思いますので、しっかり検索してのネット予約、もしくは早めに旅行社に相談されるのがよいかと思います。

あと学会には不向きですが、私が死ぬまでに一度泊まりたいと思う旅館がこの区域にありますので、ついでにご紹介しておきます。ご存じの方もいると思いますが、ハリウッドセレブは京都に来ると一流ホテルではなく終屋、俵屋、炭屋、吉川などの料理旅館に泊まることが多いそうです。終屋は川端康成が執筆に使っていた部屋がまだあります。それから黒澤明が定宿にしていた少し民宿的な旅館の石原も有名です。もし泊まられることがありましたら、どんなところが絶対に教えてくださいいね。

事務局からのお知らせ

～口座振込について～

* 日本ジェイムズ・ジョイス協会の会費 5,000 円（学生会員の場合 3,500 円）、および懇親会費 5,500 円は、安全のため、すべて「振込」とさせて頂いております。（会場ではお受けできません。） 下記「ゆうちょ銀行」の口座へお振込みください。

* 通信経費節約のため、通常領収証は単独ではお送りしていませんが、研究大会当日の受付にてお渡しできるよう用意いたします。（ただし、大会直前ですと口座の確認ができませんので、できるだけ5月中のお振込みをお願いいたします。） また研究大会・御欠席の方には、後日送付する Joycean Japan に同封させて頂きます。

* 領収証をお急ぎの場合、その旨、同封の出欠ハガキの備考欄にお書き添えください。 事務局にてお振込みの確認が済み次第郵送いたします。

* 誠に恐れ入りますが、振込手数料は会員の皆様にご負担頂いております。

* ゆうちょ銀行へは、他銀行からの振込みが可能になりました。 ただし郵便局からの振込みとは異なり、新たに設定された店名・預金種目が必要になりますので、お知らせいたします。

- 銀行名： ゆうちよ銀行
- 金融機関コード： 9900
- 店番： 048
- 預金種目： 普通
- 店名： 〇四八 店（ゼロヨンハチ店）
- 口座番号： 0185454

*手数料がかかりますので、「会費」と「懇親会費」は同時のお振込みで構いません。（ただし、お勤めの大学当局に研究費払いを依頼される場合、懇親会費との同時振込みは難しいかもしれません。その場合、お手数ですが懇親会費は別途に個人でお振込みください。また、大学によっては領収証による研究費（立替）払いも可能と思います。「会費」と「懇親会費」は、それぞれ別個に領収証をお出ししておりますので、同時のお振込みでも御心配なく願います。）同封の出欠ハガキに振込額選択欄を設けましたので、こちらにも念のためご記入ください。〔なお、学生会員から一般会員になられた方、その他変更等ございましたら、ハガキの備考欄でお知らせください。〕



日本ジェイムズ・ジョイス協会 事務局

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町4-2

群馬大学教育学部

吉川信研究室内